

子どもの本

研究会



【私の一冊】 『あすなる物語』 井上靖 著（新潮文庫）

熊本市長 大西 一史

熊本子ども本の研究会におかれましては、1983年の設立以来、『個』の尊重を基本理念とされ、赤ちゃんから大人まで幅広い方々を対象にした読書活動の普及や読書活動を通じた子育て支援の広がりにご尽力いただきまして、深く感謝申し上げます。

さて、今回、私が取り上げますのは、井上靖 著作の『あすなる物語』です。

この作品は、主人公 鮎太の少年期から壮年期までの成長を辿る青春小説です。そこには、感受性豊かな子ども時代の淡い恋心や大人の世界に接した時の戸惑いや憧憬、青年期の仲間やライバルとの出会いや別れ、実社会に出てからの労働と生活、そして、戦争という激動の波に翻弄される人々の姿などが描かれています。

鮎太は、その成長の過程の中で、まだ何者にもなれない自分と世間で活躍する友人たちとを比べ、「あすは檜になるう」と念願しながら、ついにはその願いを果たせない悲しい説話を背負う。「あすなる」の木に、自分の姿をなぞらえます。また、その一方で、「あすなる」の木は、戦争により荒れ果てたまちの中で、たくましく生きていく人々の姿にも重ねられるのです。

私は、中学時代に、この作品に初めて触れましたが、大学生、社会人になってからと、折に触れては読み返しています。そこには、子どもから大人になるまでに誰もが経験するような思いや、今を力強く生き抜こうとする人間の姿があります。私がこの作品を繰り返し読んでいるのは、この物語の中で、かつての自分に懐かしく出会うことができ、また、人が懸命に生きようとする「希望」の姿に力づけられるからです。

このように、人生を共に歩める本に出会えることは、とても幸運なことと考えます。本は、そのページをめくれば、いつでも変わらず同じ姿で接してくれます。それだけに、成長してから読み返す本は、読者に、かつて自身が歩んできた道を振り返らせ、新たな感動と力を与えてくれます。

その一冊は、人によって、一編の小説であったり、哲学書であったり、かつて家族に読んでもらった絵本であったり、その人その人によって異なるかもしれませんが、

子どもたちには、ぜひ、そうした一冊に出会ってもらいたいと思います。



2016年1月9日（土）特定非営利活動法人 熊本子ども本の研究会 発行